連載58 地域密着進める

女子大学の人づくり

宮城学院女子大学
学芸学部長、教授 吉村　典子

英語・文化・コミュニケーションで人と人、社会と社会のつながりを構築

情報や知識、サービスなどを扱う第三次産業の比重が増し、また人間関係のあり方もめまぐるしく変化している現代の社会では「コミュニケーション」の重要性が強調される場面が増えています。宮城学院女子大学は、学芸学部英文学科を前身に、2026年、英語文化コミュニケーション学科（仮称・以下「新学科」と表記）の開設を予定しています。社会に、そして、世界に、自らの「ことば」を届け、人と人、社会と社会との繋がりを構築し、地域社会や国際社会に貢献できる人材の養成を目的とします。

入口は「英語」です。日本では義務教育の一環として誰もが学び、また、世界では、言語が異なる人々の間でよく使われる「リングワ・フランカ（共通語）」であることから、英語は、最も多くの人と繋がる言語といえます。一方で、AIの目覚ましい発展は、外国語の習得が不要な程に、瞬時にそれぞれの話者の母語に移し変えることを可能にさせています。しかし、それに依存するということは、やがてはAIに職を奪われることになります。新学科では、AIをも使いこなし、自分の言葉を紡ぎ、人と人との関係性を築いていけるような能力を育てます。そこに求められるのは、“English User”としての「パフォーマンス」です。

しかしながら、国が目標とする水準の英語力のある高校生の割合は、宮城県は全国で最低を記録しました（令和5年度）。中・高生対象の文部科学省「英語教育実施状況調査」によるものですが、これは「CAN-DOリスト」等を参照した英語力であるため、主に、英語を使った「パフォーマンス」力の伸長が低迷していることになります。新学科は、明治19年（1886）の宮城女学校設立から昭和24年（1949）開設の学芸学部英文学科まで連綿と続く英語教育の歴史と伝統を受け継ぎ、多様化する学生の能力や資質をみながら、レヴェルにあったクラスと学生が主体となる授業運営で、それぞれのパフォーマンス力を伸ばし、学生が「English Learner」からEnglish User」になることを目指します。

同時に、流暢さや円滑さだけではないコミュニケーションのあり方を問うのが、新学科の特筆すべき点です。「英語」を入口としますが、母語や他の外国語も含めて、広く「ことば」に向き合っていきます。音声言語から手話言語まで多様なかたちで存在する言語そのものの機能や仕組みに注目し、言語学的見地からことばの力について学んでいく「言語文化」領域、そして、言語芸術である文学はもちろんのこと、文字言語から造形言語までの幅広い言語とその伝達に欠かせないメディア上のそれらの表現を学ぶことで、コミュニケーションの世界を広げていく「メディア文化」領域をカリキュラムの柱とします。そして、メディア・リテラシーを身につけ、発信力をもって、人や社会と繋がることのできるコミュニケーションの回路を構築し、省察を通して、考えを発展的に積み上げていけるような創造的なコミュニケーション能力の育成に繋げていきます。

国内ホテルでのインターンシップ。接客英語のみならず、価値観や文化の異なる外国人スタッフとの協働が貴重な経験となっている

対話型ゼミのほか、国内外研修、地域取材、留学、インターンシップ等の様々な場に身を置いて経験を積み重ねられることも新学科の特色です。以上のような学びと経験を経て、眼前の問題を俯瞰的に見る中で自分の立ち位置を考え、社会に自分のことばで主体的に関わることのできる能力を育てます。

こうした能力があることで、一般企業では総合職に就く割合が増え、キャリア形成においては、管理職に就く女性が増えるという社会的課題にも貢献していくことを期しています。

吉村　典子（よしむら・のりこ）1965年愛知県生まれ。京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了・学術博士。2002年宮城学院女子大学英文学科助教授着任を経て現職。この間、ヴィクトリア＆アルバート美術館（英国）の客員研究員、イェール大学英国美術研究所（米国）の招聘研究員として英国文化研究に従事。専門は英国の美術・建築・デザイン史。